



あらたふと 青葉若葉の 日の光

まつおばしろう
松尾芭蕉

「山笑う」季節。春に芽吹いた木々の新緑が里山いっばいに広がっています。山々の楠くすのこの木は、黄緑色の若葉を輝かせ、古い葉をひっそりと落としていきます。木々を吹き抜ける風もさわやかで、身も心もすがすがしい気分になります。

「どうして泣きやまないの」と、子どもに怒鳴ったりイライラしたりすることがある親がいると聞きますが、江戸時代の親は「子どもは泣くのが商売」と心得ていたようです。

最近、アパートに住んでいた知人が引越をしました。夫婦だけの時は感じないのに、子どもが生まれるとアパートが何となく狭苦しくなってきたとのことです。子どもも存在のほかに、子育てのための物品が増えてくるのも一つの理由ようですが、それよりも子どもの泣き声を気にしてのことらしいです。

「わが家がほしい」と思うのは自然の成り行きですが、現実はその甘くありません。「社会全体で見守り、子どもを育てる」と言うことは簡単ですが、子育てが厳しい現実がそこにはあります。

さて、自然界の花の色で、最も多いのは黄色、次が白です。5月5日は子どもの日、そして14日が母の日です。この時期、花の主役はカーネーションです。

日本に定着した母の日は、アメリカから入ってきた文化の一つです。5月に逝った母をしのぶ女性教師が、母親への感謝を生前に伝える運動を呼びかけたのが始まりとされます。

母が家事を仕切る人であれば、母の日といえども祝祭は日常に埋没しがちです。だからこそ、14日は思いをカタチにしてみるのが大切です。花を手渡すか「ありがとう」の一言を贈るか、また、久し

ぶりに字にしたためるか、いずれにしても「ありがとう」の花は何色でもうれいものです。

「ありがとう」と言いたいお母さんが近くにいない人もいることでしょう。母と子の間だけに限りません。感謝の仕方も多様であっていいし、あえて言葉にしないでいいけれども、思いだけは確実に伝えてほしいと思います。

母の日、子が母に感謝するだけでなく本音を語り合う日にするのも大切です。「いっぱいのお愛をありがとう、お母さん。きつと私も、いっぱいのお愛をあげることできる人になるよ。約束します」。

「心は心を育て、愛は愛を育てる」との思いを込めた、子どものメッセージです。



指宿市長
とよとめ 豊留悦男